

令和2年度

第1回

地域自立のための「人づくり  
・学校づくり」実践委員会

議事録（書面開催）

令和2年6月11日（木）から7月1日（水）

# 第1回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催時期 令和2年6月11日(木)から7月1日(水)

2 開催方法 書面開催

3 参加者

委員長	矢野 弘典
副委員長	池上 重弘
委員	片野 恵介
委員	加藤 暁子
委員	佐々木 敏春
委員	里見 和洋
委員	白井 千晶
委員	豊田 由美
委員	藤田 智尋
委員	藤田 尚徳
委員	星野 明宏
委員	松村 友吉
委員	マリ・クリスティーヌ
委員	宮城 聡
委員	森谷 明子
委員	山浦 こずえ
委員	山本 昌邦
委員	渡邊 妙子

## 4 議 事

- (1) ICTを活用した教育の推進
- (2) 高等学校教育の在り方(課題の提起)
- (3) その他

### **(1) ICTを活用した教育の推進**

#### 矢野弘典委員長

- 「才徳兼備」の観点からは、ICT機器を上手に使いこなせる「才」の部分を磨くとともに、今後ICT社会が進展するほど、使う側の人間性を高める「徳」を身に付ける教育に力を入れていく必要がある。
- 日常生活では、子供たちのICT活用能力は長けているが、ICTを学校教育でどのように活用していくのかについては、教員の能力が重要となる。教員の教育については、計画的に時間をかけて進めていかなければならない。

#### 池上重弘副委員長

- 4月、5月の間の県内学校でのICT活用によるプラス面とマイナス面を総括する作

業が必要だと感じる。対面型の授業ではなかなか発言できなかった児童・生徒が思わぬ視点を持っていたり、児童・生徒からの質問を集約すると思わぬ気づきを得たりすることがあり得る。一方、対面授業が生み出す一体感はICTを介した授業ではなかなか生まれない。今後対面授業に復帰しても、ICT利用の利点を生かした授業づくりを工夫してゆくと良い。大学ではそうした問題意識で現在の遠隔授業を進めている。

## 片野恵介委員

### ○ オンライン授業に望むこと

コロナ禍によりオンライン授業への関心が飛躍的に高まった中で、今まで平等に教育を施すことが難しかった登校困難な子供たちが同級生と共に画面越しに勉学に参加できる機会が与えられる。さらに、コロナ感染が重篤な症状に発展しやすいことが予め分かっている生徒に対しても躊躇なく自宅で授業が受けられるように、またそうした生徒が内申書で評価が悪くならないような施策を早急に取り組むことを望む。

### ○ タブレット端末の利用の利点

生徒のつまずきのポイント等をデータとして毎年蓄積できるようにしておく。さらに、他校も含めて高校なら普通科で情報を共有できるようにするべき。教員1年目の先生も20年目の先生も同じように良質な授業ができるように、常に教える側の指導内容がアップデートできるようなシステムを端末、サーバーにて組み上げることが肝要。

### ○ ICTによる業務の効率化を

ICTの教育現場での活用が教員にとって日々の仕事量に加算されるような付け足しになってはいけない。これ以上業務量を増やさない。むしろICTを活用して業務を効率化することで、教員が子供たちひとりひとりに丁寧に向き合える時間を増やせることが理想である。

## 加藤暁子委員

### ○ 新型コロナウイルス感染症の拡大で、ICT教育の普及がいかに遅れているのかが浮き彫りになっている現状が参考資料でよく理解ができた。とりわけP22にある学校が休校中に同時双方向のオンライン指導を通じた家庭学習が38%である現実を重く受け止めて、補正予算を導入してでも、デバイスを支給することを含めた方策を最優先項目にした方がいいのではないか。つまり、残りの6割の学校では双方向の教育がなければ、そこで、教育格差が生まれてしまう。ワクチンの開発が未知数である今、第2波、第3波がいつ来るかが分からないので、その時には是非、オンライン教室を立ち上げてほしい。

ICT教育の利点は、今まで、できなかった世界が広がるという点もある。たとえば、世界中の教室とつながることができるということもひとつである。異文化交流では、従来なら、留学生が教室に在籍するということではしか実現ができませんでしたが、オンラインであれば、様々な国々と一瞬にして、ネットでつながることができ、ある課題について、ディスカッションをすることができるし、英語の学びにもなる。

私は、現在、高校生との交換留学の世界的なネットワーク公益財団法人AFSの理事長を務めています。今回、3月から1か月間で、36カ国に年間留学をしていた日本からの高校生350人を帰国させ、35カ国から260人日本に留学していた海外からの高校生を母国に帰国させた。その後、早期に帰国した日本人や外国人の留学生に対して、異文化理

解のオンライン教育をフォローアップとして行っている。異文化理解をするための教材を帰国生や留学生たちが議論し合うオンライン教育である。

また、AFS日本協会では、日本政府の奨学金事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」で年間アジア20カ国・地域200人を受け入れていますが、国境が封鎖になっていますので、3月来日が秋に延びている。このため、過去2年来日をした同窓生を中心に日本語や日本文化を今年留学予定の奨学生に紹介するオンラインが立ち上がるなど、アジア各地で日本について学ぶオンライン教育が始まっている。

一方、国内では、私が主宰する全国の高校生を対象にした「日本の次世代リーダー養成塾」でも、今夏は静岡県をはじめとする参画する地方自治体の高校の夏休みが休校措置で確定しなかったため開催の時期がなかなか決まらなかったが、共通の夏休みである8月8日から5日間集中講義とディスカッションをオンラインで、その後日曜日に4回オンラインで行い、9月の4連休では、リアルに集まることも重要と、毎年行っている福岡県宗像市に集結して、オンラインでクラス別に進めた「アジア・ハイスクール・サミット」の発表会を行うこととした。マレーシアのマハティール前首相もオンラインで講義をしてくださる予定である。サミットでは、「ウィズ・コロナからポスト・コロナへ～高校生が起こす社会変革」を議論して、具体案を策定する計画である。このように、オンラインとリアルな教育を組み合わせ、どうできるかの社会実験をする。

オンライン教育を「コロナだから仕方ない」から「オンラインで世界が広がった」とポジティブに考える教育の必要性があるということを実験現場で実現してほしい。

もちろん、留学生が教室に実在することによる異文化教育、口角泡を飛ばすディスカッションをするリアルな現場があることの方がいいに決まっている。しかし、そうもいかないコロナの現実をいかにポジティブに化学変化を起こすことができるかが今、教育に求められていると思う。

ちなみに、パソコンやIpadを1人1台支給しないと双方向ができないと手をこまねいている暇があったら、スマホがあるなら、まずZoomをつなげてトライするといった臨機応変なものの考え方が想定外のことが起こっている状況ではやらないといけないことではないだろうか。

### 佐々木敏春委員

- ICTを活用することで教育の幅は際限なく広がってきている。やろうと思えばできないことがない世界だからこそ、五感を震わせる教育を指向したいし、地域や国を超えたインタラクティブな交流から多様性を学ぶとともに感性豊かな子供たちを育てたい。
- そのためにも生徒の情報リテラシー格差を少しでもなくすることは重要で、早い段階からの一人1台の端末確保は必須である。操作スピードの向上から利用用途の拡大、情報発信能力向上へと繋がっていくと考えるからである。

ただ足元を見れば、プライベートでの通信環境は学校以上に充実しており、多くの子供たちは生活の中で経験的に身につけたメディアリテラシーのみで現実社会と対峙していないだろうか。そうであるなら、まずやるべきは学校でのメディアリテラシー教育の更なる充実だと思う。

そうした環境を整えながら生徒一人ひとりが興味を持って主体的、能動的に勉強に取り組む力をつけていくことが大切ではないか。

- こうした中、教員も目まぐるしく変化するICT環境に適応することが求められるが、スキル面での適応はプロのサポートなしに実現不可能であることは企業活動、社会活動からも自明である。ICTはツールに過ぎないが実業をダイナミックに変えるので、もちは餅屋と割り切りプロと委託契約する中で教員が持つべき水準を明確にすべきだと考える。
- 教育ツールがメディアにあふれ返り、塾がAI活用で偏差値至上主義をさらに加速していくと予想される中で、学校や教員に求められる価値は何かをもう一度しっかり議論することが必要ではないか。その中から学校にはどのような場の在り方が求められ、それを実現するためにはどういう教員像が必要かということが明らかになってくると思う。このあたりのイメージは各人各様であり、教員になりたい、と思える動機をしっかりと打ち出すためにも大切なプロセスであると考え。

### 里見和洋委員

- 学校は学問と共に人間関係を学ぶ場でもあり、あくまで対面が教育の基本と思う。
- 一方で我が国のICT化は世界水準から相当劣位にあり、コロナを契機とし県として（対面とのバランスはとりつつ）ICT活用の教育環境づくりを一気に押しすすめる時宜と考える。（掛川西高校、静岡聖光学院の良い見本あり）
- 但し、運用面では、Wi-Fi環境の家庭内機会均等と情報リテラシーに注意する必要がある。

### 白井千晶委員

- 今回の新型コロナウイルスを踏まえた課題
    - ・ 学校教育の限界があらわになった。動けたのは塾と一部の教科書会社と、一部の私立学校と大学。公立小中学校はどんな課題があったのか、現場で、市町教育委員会で、県教育委員会で、また教育分野以外を含めて、改めて問題点を整理すべきである。
    - ・ 家庭のICTと学校が接続していない。紙媒体の宿題を取りに行き、分刻みで時間割が作られ、教員はオンラインのクラス交流（遠隔の同期型）をすることもできず、オンデマンド授業もできず、電話で家庭訪問する程度。
    - ・ ICTで教材共有できるオンデマンド授業（非同期型の遠隔）、心のメンテナンスと学びをするためのオンラインのクラス運営、紙媒体の課題と振り分けをすべき。クラス担任と教科担当の垣根を再考する必要がある。
  - 今後
    - ①ハード整備
      - 別県では有償でモバイルWi-FiとiPadを貸し出している。有償だが就学支援でまかなえると良い。スマホでも耐えるような教材の作り方が必要。
    - ②
      - (1) 教室での集団教育を前提にしない。
      - (2) 各教員の自由裁量を認める。新型コロナ下では、教員がオンデマンド授業をしたいと思ってもできなかった。
- 一人でも家庭でのICT環境が整っていないと新しいことができない。しかし整っていない人のフォローをどうするか担保しながら新しいことを展開していかざるを得な

い。

(3)学校を越えて授業素材を共有する。分担して授業素材や教材を作成する。市町の境を越えて、授業教材を共有することで、自身が作成する授業教材について存分に教育した教材を作成することができる。ノウハウについて教員間で話し合い、ネットワーク作りと学びあいにつなげることができる。

新型コロナ下でそのようにしている自治体もあった。

### ③人材育成

I C T活用の育成教育者は外部の専門家に依頼する。そのための予算を計上する。教員負担を増やさないため。学校からの情報分野についてもできるだけ予算を計上することが望ましい。

#### ○ 中長期的な視点

業者のシステムを有効に利用する。

記名、押印、紙媒体提出、学校のメールアドレスを公開しておらず電話・F A X対応のみ、教室集団教育、紙媒体文化の見直し。企業並み、進んだ私立学校、大学等から学ぶ必要がある。

### 豊田由美委員

○ I C T導入については早期の整備を求めたい。しかし、I C Tが導入されたからといって全ての授業が成立するわけではないと考えられるため、対面少人数（レポートを含む）の大学のゼミのような方式とI C Tとの併用を望みたい。

また、特支に通う生徒については、放課後デイサービスでのI C Tを利用した学習支援の取組等を行うことにより、家庭や学校の負担が少なくなる可能性もあるかと思う。

### 藤田智尋委員

○まず、実際にオンライン授業を2ヶ月ほど受講して、良い点と悪い点をまとめてみる。

良い点

- ・通学時間がないので学校から遠い実家から通う学生の負担が軽減された。（朝ギリギリまで準備ができる、通学定期を購入する必要がなくなり金銭的に余裕ができる等）
- ・オンデマンド式の授業だと自分のペースで受講できるので周りを気にする必要がない。

悪い点

- ・教授によって授業の進め方がかなり異なるのでそれぞれに対応するのが大変。（Z o o mを利用する人もいれば音声ファイルが送られてくる人もいる）
- ・教授の方がオンライン授業に対応できていない場合がある。（通信の仕方が分からない等）
- ・授業資料が多く、プリントするのにお金がけっこうかかる。
- ・授業の雰囲気は掴みにくい。

このような点が挙げられる。しかし私はオンライン授業化におおむね賛成である。今回新型コロナウイルス感染症の拡大によりオンライン授業が実施されたことによって、I C Tを活用した教育についてより細かい課題が浮き彫りになったと考える。

そして、通信回線が弱い家庭への配慮も必要だと感じた。そこで、図書館や地域の文化センターを一部オンライン授業の受講者向けに開放してみたらどうかと考える。オン

ライン授業のみの利用であれば人が向かい合ったり、その場で会話したりすることもないので新型コロナウイルスの感染拡大防止には十分配慮できると思う。

### 藤田尚徳委員

- 現在、コロナ禍にあるので非常にICTを進める動きが強いが、これは非常に予算もかかることである。今後コロナがどう変わっていくのかで、大きくその方針も変わると思うが、それは今の段階では誰にも分らない。例えば市内の全小中高生にiPadなどを支給するような事になれば莫大な予算が掛かる。一方で通常学習に戻ればそれは一気に無駄にもなる。その予算があれば、より高度な設備を学校に設けて先進的な技術教育を行うことも可能になるであろう。静岡県が才徳兼備を目指すのであれば、ハードの支給も大切であるが、より効率的で高等的な学びの環境を与えることも重要であると考え

### 星野明宏委員

- 今回の新型コロナウイルス感染症対応を踏まえた課題  
コロナ禍が早く収束してほしいという「願望」が強く、長期化するということを前提とした「悲観的視点からの準備」が効果的にできていなかったと感じた。
- 3月段階で考えられた対応策（第二波襲来に向けた準備策も兼ねた私案）

#### 調査

- ・OECD調査でも明らかだが、教育現場におけるICT環境整備における日本の遅れは顕著であり、短期的対応は難しいのは事実であった。しかし、家庭内ではどうであるかの調査・検証の余地はあったように思われる。
- ・「10%ができないからやらない」ではなく「90%の救えるところから救う。支援が必要な10%に対して何をどうするか」という発想も大切だと思われる。

#### 具体的実践

- ・校長メッセージ、朝のホームルームの動画配信＋プリント学習
- ・デバイス、Wi-Fi環境のない家庭には、DVDに焼いて動画配布＋プリント学習

#### 4月以降への環境整備

- ・県内高校によってICT教材が統一されていないことによって、提供される教育品質の格差が考えられる。県がリーダーシップを持ち、各教科、各単元を分担して動画コンテンツを作成
- ・同時に教員へのICT研修実施（教員によってICTスキルに大きな格差があるので、苦手な教員のレベルに合わせた初歩的なもの）
- ・デバイス、Wi-Fiの貸与等、具体的支援実施

#### ○ 各取組分野に係る今後の方向性

##### ①ハード整備

- ・高等学校においては、PCを前提とし、機種を更新を考えるとBYODが望ましい。  
（現状はハードルが高く感じるかもしれないが、大学進学後も就職後もBYODによるPC所持が当然の時代が来る）
- ・特別支援学校においては、状況によりタブレット又はPCの貸与が望ましい。
- ・普通教室全室を無線LAN環境とする（クーラー設置と同様、全国的に設置の流れは止

まらないので先駆けてやるべき)

## ②ソフト整備

- ・ E d T e c h の積極的活用の時代は目の前に来ている。先駆けて取り組むべきである。
- ・ A I によるアダプティブラーニング機能を活用する。T e a c h i n g が効率化されることで創出した時間を P B L、A L に活用する。
- ・ 「オンラインネイティブ」世代と呼ばれる現在の学生はオンラインを通じた国際交流や高大接続、企業との連携などに対するハードルは極めて低くなる。ハード面が整備される時期に間に合うよう受け皿を用意すべき。
- ・ 創造性を育む、伸ばす S T E A M 教育視点を重視した教育機会の推進。

## ③人材育成

- ・ 公立、私立の垣根を越えた「オールシズオカ」としての授業見学会や共同勉強会の実施。I T エンジニアのアドバイザー積極的活用。
- ・ ティーチャーからコーチ、ファシリテーター、メンターへの役割転換のための意識啓発研修の実施。

## ○ 市町立学校（小中学校）への県としてのアプローチ

- ・ 先進的な取組を行っている私立学校と先進モデル事業推進の県立高校の共同研究を県が主導で推進し、市町立学校に情報提供、見学開放を積極的に実施。  
(公立・私立の叡智を結集し、シズオカ教育モデルを構築)
- ・ 吹きこぼれ、落ちこぼれ、学習障害等の生徒救済のための I C T を活用した個別のアプローチの具体策を県主導で提示、アドバイス。

## ○ I C T 化を踏まえ学校教育の在り方の変革に向けた中期的な方向性

- ・ 「教育のシズオカ」「子育てのシズオカ」をゴールイメージとしたバックキャストイング的思考を持てるかどうかにかかわらず静岡の未来がかかっていると感じる。  
I C T 活用することで地方のディスアドバンテージの多くは解消される。リアルな環境の強みがある静岡だからこそ、I C T 先進県になることで政策が人口流出政策以上に人口流入による受入れ政策が重要になることで世界に誇る地方モデルが実現できると確信している。

## 松村友吉委員

- 資料 3 に示されている、取り巻く状況、取組と課題、今後の方向性、の内容は、大変納得できるし、是非その考えで進んでいただきたいと思う。
- 企業や行政も同じく、今回のコロナショックで、I C T 推進は格段にスピードアップしている。この流れに乗って、最低限の環境整備と人材教育を進めるべきである。
- I C T の活用によって、一人一人の個人が起点となり、考え整理し工夫し発信する流れがつけられる。一人の生徒・学生そして教員も、あるいは健常者も障害者も、同等に学習や教育に参加出来る。今目指すアクティブラーニングの推進と期を同じくして、多様な人々が能動的に参加出来る環境が急速に整えられるということである。

## マリ・クリスティーヌ委員

- 教鞭をとっている大学でオンライン授業を実施しているが、なかなか素晴らしく以下のような長所がある。



①出席率が良くほとんど全員が出席でき、遠方の学生も参加可能となる。

②平等に意見を聞くことができる。

さらに加え、小、中、高などではいじめなどが起きにくく不登校の子どもも参加しやすいと考える。

問題点としては集団生活ではないので友人を作りにくいなどの難点があるほか、機材の準備とセキュリティの徹底が必要となる。

## 宮城聡委員

○ S P A Cでは2月末からの休校以来、外部とのつながりが減ってしまった生徒たちに対してなんらかのサポートになることをしたいと、これまでの「S P A Cシアタースクール」等の蓄積を踏まえて検討を重ねた。

当初Z o o mを用いた双方向での「基礎訓練・発声・ダンス」のレッスンを構想したが、断念せざるを得なかった。それは以下の2つの理由による。

1) 生徒により I T環境に差がある。特に、家庭にW i -F i等のインターネット環境が整っていない生徒がいる。

2) 各自の家からZ o o mで参加すると、プライバシーが映り込み、その家の経済レベルが窺われる。(Z o o mには「バーチャル壁紙」の機能があるが、古いスマホやスペックの低いP Cではそれが使えない。)

結局上記の1) 2)ともに家庭の経済力の差が生徒のオンラインコンテンツ参加の壁となっている。知り合いのツテで何人かの高校の先生に休校中のオンライン授業について尋ねたが、公立校の場合はやはり生徒のW i -F i環境の不揃いゆえに双方向の授業が行えていなかった。

\* S P A Cは一昨年から子ども向けダンスワークショップで東京都豊島区と提携しているが、豊島区ではすでに小中学生全員にひとり一台のタブレット端末が行き渡っており、Z o o mでの双方向ダンスワークショップが可能になっている。

今後、静岡県でも「タブレットひとり一台」が早急に行き渡ることを期待するが、それと同時に、家庭でのインターネット環境の不揃いにも対策を講じるべきと感じている。

○ 教育現場においてI C Tを活用すべきであることは論を俟たないが、一方で、今日I Tへの依存度が高くなった人々が「聞く力」を失いつつある、という負の側面にも目を配らねばならない。今春の自主隔離中にもその傾向は露呈し、「自分と同じことを感じている人たちとしか話さない」という現象となって現れた。つまり「自分とは異なる価値観を持つ人と対話をする」を避けることができる、のがネット社会の特徴である。特に若者にとってスマホは「安心するための道具」であって、他者を知るための道具ではない。

したがって学校でのI C T機器の活用においては、機器を通して異なる価値観と出会うこと＝異なる価値観を持つ他者との双方向性、を実現することがポイントになるだろう。(スマホと比べて4倍以上の画面面積があるタブレット端末なら、「世界を知る窓」として機能しうる\*下記注。)

○ 学習が「知識偏重」になってはいけない、考える力を育まなければならない、と言われて久しく、大学入試もその方向へと進みつつあるが、一方で「十分な知識量を持っている」こともまた必須である。知識を取り込むことが単に受け身の学習にとどま

るときにその弊害が目立つだけで、知識を蓄えることに主体的に取り組めるならそれは大きな強みとなるだろう。（思えば学ばざれば則ちあやうし・・・。）そして知識を吸収するためには、ICT機器は本来、非常に有用である。

しかし教材の開発は、まだ道半ばと思われる。いまだ、紙の教材をそのまま移行した（そこに少し写真や動画を挿入した）段階のものが多い印象である。

今こそソフトウェアの人材と協働して、ゲームとして知識を獲得してゆく教材（ゲーム教材）を開発すべき時だろう。かつての「学習まんが」が侮れない効果を持っていたのと同様、いやそれ以上に、生徒の知識量の底上げに効果を発揮するだろう。

\*注：フランス文化省が、子ども向け文化施設への導入を進めている教育装置に「Micro-Folie」というものがある。

[https://lavillette.com/page/micro-folie\\_a405/1](https://lavillette.com/page/micro-folie_a405/1)

<http://www.bachibouzouk.net/en/portfolio/microfolie-a-digital-museum/>

これはいわゆる「デジタルミュージアム」だが、必要なハードはプロジェクターにスクリーン、そしてタブレット端末だけである。設置部屋面積も学校の教室くらいで足り、これによってどのような地域に住む子どもも芸術へのアクセスが容易になる、という趣旨で開発されている。僕自身は「デジタルメディアで芸術に触れても真の感動がないだろう」という先入観を持っていたが、しかし次第に、小・中学生にとっては、こうして一流の芸術との距離が近くなり、能動的に作品への「探検」に入ってゆけることは重要だ、と考えるようになった。タブレット端末の画面は（スマホとは違い）絵画や彫刻を子どもたちが覗き込むための窓として機能しうると感じたからである。このことは芸術作品に限らず、地理や自然科学でも言えるのではないか。「自分の知らない世界」と出会う窓としてタブレット端末が機能する、そういう活用の仕方を先生方に探求していただきたい。

また、県内の図書館等に試験的に「Micro-Folie」を設置して、デジタル教材の研究開発に利用することも県として検討していただきたい。

- スマホしか持っていない子と、パソコンやタブレットも持っている子で、情報収集能力と文章記述力に差がついてしまう。

### 森谷明子委員

- ICTによってより良い学びがもたらされる分野とそうでない分野があるので、すべての教科や分野をひとくくりで考えるのは良くない。
- 特に芸術分野はICTでの授業は大変困難である。
- ICTによって時間や労力が短縮される分、今まで縮小傾向にあった側面、たとえば生徒と教師の時間をかけたひとり一人への指導、等にエネルギーを注げると良い。
- 生徒が使用する端末はなるべく大きなものを用意すること。（スマホは好ましくない）
- 5Gや電磁波の人体への影響、心身のストレスなど、いまだに未知な部分も多く、生徒児童が一日の中で画面に向かい合う時間がさらに増えるため、それを補う取組も同時に進めるべきである。たとえば、「人と人との対面」「人と自然の対面」を極力意識した学びを心掛けるべきだと感じる。

- 具体的には自然に関わる機会を増やす、人と触れ合う、人の話に丁寧に耳を傾ける、他のために働く、物事をむやみに合理化せずに、無駄と思えることにも足を運ぶ、などの機会作りを、同量のエネルギーを注いで進めるべきである。
- 何をもって「先進的」とするかを慎重に考え、一度定着したシステムでも、何か問題があれば、常に柔軟に改善していける体制を心掛けるべきではないか。
- ICTの活用によって生じるリスクについて、専門家の意見も聞きながらもっと深く認識しておくべきだと感じる。
- ゲーム依存、ネット依存が社会問題となっている中、「遊び」「コミュニケーション」に加え、「学校での学び」まで端末を通して行われるとなれば、一人の人間が成長していく過程のほとんどの時間を、端末の画面という二次元世界と向き合って過ごすことになる。
- 「五感」という人として最も必要な能力が損なわれないように、細心の注意を払うべきかと思う。

### 山浦こずえ委員

- 普段は行けない場所、会えない人と繋がることで前のめりになる。
- オンラインで一斉回答、シェアができる。発表苦手な児童生徒からも。
- Tik Tokやゲーム等を使ってアウトプット。（地域の魅力・課題発信や宣伝）
- 教員は授業ではクイズ番組のMCであり、子どもが「問い」を立てられるよう双方向やゲスト授業ではファシリテーターである。
- 本人の癖や躓きを把握でき繰り返し解くことで自信回復。
- 皆同じように目の前でスライドや作品を見ることができ、不公平なく集中。
- 教師同士が動画を視聴し合えることで、緊張もコラボ授業も生まれやすい。
- やはりリアルな体験、生身コミュニケーション、自然に勝るものはない。（目の合わない若者、電話さえできない若者）

### 山本昌邦委員

- 人は社会的動物で、つながりが必要である。（人間性が大切）スクリーンや仮想現実だけでは不可能である。
- 命に関わると考えられる農業が国内では大切になる。
- 気候変動の危機にある現在、エネルギーを使わずに自然やスポーツを楽しむ方法が必要である。そして環境を守る。21世紀型の働き方、学び方にスタイルを変えるチャンスである。

### 渡邊妙子委員

- 新型コロナウイルスは、人類の文明に対する挑戦である。人間は、時と場を超える優位性と技術をすでに開発しており、ICTはそのひとつである。ICTの活用は、子供たちは大喜びである。子供たちの才能を伸ばすチャンスである。無限の可能性を秘めている。  
時と場に縛られていた学校教育を、大転換するチャンスである。トライをしましょ

- 豊かな静岡県では、ICTの設備も可能な限り整えるべきと考える。

## (2) 高等学校教育の在り方(課題の提起)

### 片野恵介委員

- 世界的な動画サイトユーチューブでは、伊東市のPR動画が動画掲載から2週間で2千万回再生されている。日本人以上に外国人が閲覧し、関心を示すコメントを動画に寄せている。

伊東市の魅力は単に観光で終わらせるには非常にもったいないと昨年度より私自身強く思っていた次第で、この動画の関連動画として新高校PR動画を載せることは、世界に向けて広く周知してもらおう試みとして検討する余地がある。

海外の子供たちに向けて日本の高校をアピールするというのはまず聞くようなことはない。しかしここで新たなチャレンジとして、地方の一高校に留まらないグローバルな高校を目指し、まずは芸術分野の教育の充実化、他国の生徒の受入れをどうするべきかを早急に議論する必要がある。

伊東市が芸術都市を目指すというのであれば、これを教育をもって県が後押しをする。雲を掴むような話ではありますが、このまま地域の子供たちの人数だけを頼りに高校を運営していくことは、伊東市及び県に対して甚だ失礼な物言いとは思いますが、「心許ない」と感じる。

そこで海外の子供たちを受入れるにあたり、IB教育と芸術専攻科との融合は可能か。目指すところは言語、国籍を選ばない全人教育を高校課程で実現することである。IBに関しては全くの無知ではあるが、他県や世界の子供たちが画面越しではなく実際に自然環境すばらしい伊東の地にて学びたいと思う知識、技術へのアクセスを容易にするツールとしてIB教育が活用できないかを知りたい。

### 加藤暁子委員

- 「知性を高める教育」では、コロナ感染拡大を機に起こっている米国における人種問題のデモや暴動、中国と米国の覇権争いなどから見られる資本主義と社会主義の問題点、コロナを契機に起こっている独裁体制、コロナ感染拡大の背景である地球環境問題など、様々なことを考える良い機会だと思う。まさに、歴史や哲学を学ぶ絶好の機会ではないか。高校でのリベラルアーツをきちんと学ぶことで、その後の大学での専門教育に進むための生きた教科書が今、私たちに突き付けられていると思う。

今後、休校などがあるのであれば、高校生が読むべき100冊の本などを歴史学者である川勝知事が選び、課題か参考図書として、全校に示すことなどをされたらいかがか。このような時だからこそ、本を読むことができる環境ではないかと思う。

「グローバル人財の育成」では、先に述べたオンライン教育で、海外とつながる教育の実践をすると良いと思う。そして、コロナが終息したら、留学生を迎え入れてリアルな異文化理解教育に発展したら良いのではないか。

### 佐々木敏春委員

- 教育の在り方と教員の質については、構造的な問題をはらんでいるのだと感じている。まず、教育の在り方については、本当の意味で偏差値至上主義からの脱却を目指したい。

社会に出れば答えは一つでなく、むしろ正解がない課題に直面する方が多い。そういう課題にどうアプローチしていくかということのを早い段階から身に着けることが、その後の人生や社会を豊かで可能性のあるものにする近道だと思う。さらに生徒にとって自分が学んでいることが世の中とどう繋がっていくのか、という動機付けや、自己肯定感の獲得に繋がる体験の充実が欲しいところでもある。

- 今後、生徒が五感で感じるような教育をしていくには、教員のみでは覚束ない状況ではないだろうか。企業がそうであるように教員の年齢構成は50から60歳にボリュームゾーンがあり、その後の30から40歳は採用の少ないゾーンになると思う。この先10年を考えると、教員の技術移転や人格形成にも限界がある中で、外に開かれた高校教育を指向せざるを得ない状況かと思う。すでに一部学校が取り組んでいるように実学への探求ということで企業からの講師派遣を受けたり、海外のように年間100時間程度の地域貢献ボランティアを実施することで、教師と共に社会や地域の実像を肌で感じ、ともに学んでいくという経験を重ねていくことが必要ではないだろうか。

### 里見和洋委員

- 常に人格形成に努めさせることが重要。（私学では基本方針に打ち出している先も多いと聞く。）
- コロナを受け、地方分散型社会が望ましいのではないかという論調を見る機会が増したようにも思われる。

学校でも将来に渡り地方との関わりが続くような授業内容が考えられないだろうか。例えばICT活用で地域毎の特性を徹底的に学び、事業所ワークショップで地域企業ワクワク体験など。

このような地域を好きになる仕掛けづくりをしていく中で、その地域への就職や起業人が生まれてくるのではないか。

### 豊田由美委員

- 現在のような進学を目的としたカリキュラムに加え、AO入試を高等学校でもできないか。AO入試については各校の特色となるようなものが良いかと思う。（例：演劇、サッカー、ラグビー、吹奏楽など）

また、基本となる学習に加え、コミュニケーションが活発になるような地域連携型の授業（地元企業や商店との連携）や、地元伝統野菜や工芸品の連携学習授業などを取り入れることで、技芸を磨く人につなげていくシステムを具体化してほしい。

### 藤田智尋委員

- 私は私立高校出身なので公立の高等学校教育とは少し違う教育を受けてきたかもしれないが、やはり検討の視点にあったような地域社会との協働や才能を伸ばす教育の機会はなかったと感じる。特に地域社会との協働は重要な問題ではないかと考える。進学希望の高校生の多くは県外大学に進学し、そのまま静岡に戻ってこないというケースがある。私も大学入学直後は東京や大阪など都市部での就職しか考えていなかったが、サークルの活動を通して静岡県内にもおもしろい企業がたくさんあることを知った。その県内企業の魅力を高校のうちから伝えていかなければならないと感じる。

## 藤田尚徳委員

- 例えば行政が行うSDGsなどを一緒に進めることも重要であると考え。これからは人と地域と企業がいかに共存していけるか、が重要になる。私立の一部の学校ではSDGsのプレゼンなどを積極的に行っているが、公立高校ではなかなかそのような活動を新聞等で目にする機会がない。行政主導で学生にそのような学び及び発信（プレゼン）をする機会を与えることも必要である。更にキャリアにおいては「働く」を取り入れることが望ましい。実社会に出る前に「お金の流れ」や「経営のしくみ」を実体験することで、晩学の必要性に気付く機会になると考える。

## 星野明宏委員

- あくまで私見ですが、地方の意識に潜在的に存在する「私立高校が公立高校の補完的存在」である意識を教育に携わる当事者が変えていくことが急務であると思う。  
私立は中小企業的な動きができるので、先駆的な取組やチャレンジすることに特化する。県が主導して、公立高校にも汎用的に取り組めることを、よりブラッシュアップして広く実現させていくという役割分担の観点が絶対に必要である。一方で私学は予算面も自己責任、受益者負担の要素が強く、実際にはどこもぎりぎりの中で工面して運営している。この点においても補助や支援を厚くしていただきたい。
- 「ICT環境整備（現状からの改善ではなく、日本一の環境整備）」「STEAM教育」「ICT、AIを活用したアダプティブラーニング」「シズオカの教員はティーチャーからコーチ、ファシリテーター、メンターへ」この4つが実現できれば世界に冠する「教育のシズオカ」実現も夢ではない。
- 高大連携に関しては、静岡県立大学と静岡文化芸術大学との積極的な連携をぜひ実現してほしい。「世界に名だたるシズオカの県立大学」構想を持つことで10年間の一貫教育のストーリーは自ずと見えてくると感じる。

## 松村友吉委員

- 「才」については、日本が今立ち後れている「グローバル人材」「イノベーションを起こす人材」を輩出する教育が必要である。そのために国の教育改革に則って、県の「先端技術活用教育ロードマップ」を着実に実行していくことが肝要である。  
今まで静岡県の高等学校教育では、堅実・平等の人材育成が進められ、能動的で型破りな人材輩出は想定してこなかった。これからのVUCA社会で頭角を現す、ある意味のエリート教育が望まれる。
- 「徳」については、特段触れられていないが、むしろトータルな「人間力」においては、この「徳」を身につけているか否かが、最も大事なことである。そしてその「徳」を身に付ける契機として、実在する人物かどうかの別なく、「徳」ある人物に触れ自らを省みる機会を、是非、高等学校教育の間に持たせたい。

## マリ・クリスティーヌ委員

- 英語教育の徹底が重要なカギになると思う。話すことに躊躇しないような生きた英語を教えることで、世界に羽ばたく人材を生み出すことができる。

協議事項①と同じく大学のオンライン授業に関することで企業の方に授業に入っているが、これまで触れたことのなかったモノづくりの素晴らしさや社会人の視点を直接学ぶことができ、さらに若者の意見を取り入れることが企業のメリットにもなっている。

静岡県が他県に誇れる技術やモノづくり等をオンラインで子どもたちに発信することで、産業を育て、子供を育てることが可能になると思う。

### 宮城聡委員

- SPACはこれまでも「劇場は“人間とはどういうものか”を学ぶ教育機関である」「学校の学びを補う場所である」という信念のもとに活動してきたが、この3年間ほど、SPAC鑑賞に来る高校が漸減傾向にある。(本年度は例外として。) SPACとしては「県内の高校1年生が全員SPACの演劇を鑑賞できる」といった目標を立てていたが、足踏み状態となった。もちろん各高校との連絡は取り合っているが、そこで何より感じるのは、「先生が忙しすぎる」という現状である。先生自身が、「視野を広げ、世界の多様性に興味を持ち、自身を相対化する」ための時間を持っていない。それゆえ、演劇の効用＝「自身を相対化し、世界の多様性に興味を持つこと」の必要性にも思いを致しにくいようである。

なぜ先生がこうも忙しくなってしまったのか、ぜひ実践委員会・教育委員会の皆様に分析していただき、たとえばそれが「本来家庭が責任を持つ部分までも学校の責任だと言いつける保護者」の増加など、社会そのものの在り方に原因の一端があるとなれば、地域全体での解決に向けたムーブメントの背中を県が押し上げていただきたいと思う。

- SPACは「演劇界のウィーン・フィル」になる、という目標に向けて一步一步精進しており、その一環として「演劇のスペシャリストを育てる世界最先端の高校」に全面的に関わることができる。高校の演劇コース設置について、例えば「2023年度スタート」等、具体的なロードマップを策定したい。

なお、この演劇コースでは外国語にも力を入れ、＜演劇コース卒業後に既存の国内の演劇大学に進学するのではなく、総合大学で一般教養を広く学ぶか、または海外の大学に留学する＞ことを勧めたい。

世界のトップに行く演劇人になるためには「人間を知ること・世界を知ること」が必要であり、そうして他者への想像力を獲得してこそ、演劇を社会に還元することも出来る。今日国内では演劇系大学が増えているが、いたずらに演劇業界人としてのデビューを早めるだけで、むしろ若者の視野を狭めているのではないかという危惧を抱いている。天才は教育で生み出すことはできないが、演劇はチームプレーであり、天才だけのチームというものはない。そして天才以外は教育と環境によって育つ。ウィーン・フィルの楽員がみな天才なのではなく、ウィーンという環境とウィーン音楽院の教育によってウィーン・フィルが出来上がる。静岡も舞台芸術においてそういう場所になることができると考えている。

### 森谷明子委員

- 進学校にこそ、地域連携やキャリア教育の機会を  
・現在の地球社会は、SDGsの17の項目にあるように、早急に変革すべき深刻な問題

にあふれかえっている。すでに持続不可能な様相を見せる面々に対し、全人類が叡智を結集して真剣に取り組むべき時代に入っている。その一方で、日本国内の「高校」という存在は、あたかも温室のように社会から隔離され、社会との関わりを持たないことが特権のように許されていると感じる。「自分の進路」「自分の将来」のための準備期間としての「高校」という側面が強く、つまるところ今自分に与えられている時間と労力のほとんどを、「自分」の為だけに費やすことが許されている場所であると感じる。

- ・「学校」という枠の中で「勉強」と「部活」にのみ専念していると、社会の為に自分は何ができるかを立ち止まって考えることもなく、また社会によって支えられていることにも気付きにくい。能力高くリーダーシップがあっても、抱く志そのものが曖昧で、社会も世界も現在という時代そのものがほとんど見えていない生徒が圧倒的に多いことは、大変勿体ないことである。
- ・「自分」と「社会」との「隔離」に気付かぬまま、進学し、就職するため、社会を広く見渡す機会もなく「社会人」になってしまう。その結果、漠然と社会に流され、自分の生活を守ることに専念する、典型的な「日本の大人」を量産していると感じる。
- ・現在の高校生の重点的な活動は、①「主要5教科の学び」②「部活動」であるが、ここにもう一つの「第三の顔」として、③「地域社会と関わり行動する等の活動」の項目を設けたい。
- ・こうした取組は、すべての高校で行われると同時に、特に進学校で積極的に定着してほしいと強く感じる。
- ・しかしながら、こうした地域社会と関わる取組というのは、「進学」や「就職」に直接関わってこない、どうしても軽んじられてしまう。表面的に講座等を開設していても、半ば形骸化している学校も残念ながらある。

#### ○ 高校時代に卒業研究、卒業論文を

- ・まずは「主要5教科」「部活」と同様に、高等学校にとって「第三の顔」となるべく、地域社会と関わる活動や、自らの進路に関わる分野のより専門的な探求を、「研究、論文」の形にまとめ「卒業単位」に課する。
- ・充実した研究が見込まれる生徒に関しては、より充実した「スペシャリストを育成する環境」を整える。
- ・県内大学進学や就職において、AO入試、推薦入試の枠を広げ、こうした探求が進路に生かされるようにしたり、あるいは奨学金付与の対象とすれば、学校も生徒も保護者も、意欲をもって積極的に取り組むことができる。
- ・さらに優秀な人材を県内大学、県内企業に留めたり、Uターンさせるきっかけになるのではないかな。

#### ○ すでに県内の高校で「地域連携」や「キャリア教育」において、素晴らしい取組があるので、ご存じとは思いますがあらためて紹介する

##### ① 静岡県立駿河総合高校『キャリア探求 with SDGs 支援プログラム』

- ・駿河総合高校は静岡県の県立高校では2校しかない「ユネスコスクール」登録校。  
<http://www.unesco-school.mext.go.jp/muoseh4ay-18/>
- ・すべての生徒、職員が「持続可能な開発のための教育」を意識し、気候変動、人権、



フェアトレード、生物多様性など、全世界の問題を知ることからはじまり、身近な問題や自らの進路をSDGsと関連付けて探求する。

- ・探求の分野に偏りがなく、選択肢の多さ、視野の広さが他の総合学科高校とは異なる点であると感じる。
- ・経済的に余裕のない生徒の為にも、全生徒に対し金銭的負担を一切かけずに行っている。
- ・また、他の普通科や進学校で十分に応用できる汎用性を心掛けているので、全県下で行うひな型になり得る取組であると思われる。

## ②静岡市立高校『SSH（スーパーサイエンスハイスクール）』

- ・理系分野の生徒を育てる目的で国から補助金を受けて行ってきた『SSH』を、「科学探求科」を対象に行い今年で8年目となる。県内大学との連携なども充実し、大変成果が上がっている。
- ・さらに昨年度より、文系も含めた「普通科の全生徒」を対象に『SS探求』を設置し、早くも充実した成果が得られている。
- ・『SSH』は近い将来は終了するプログラムなので、その後も継続的に取り組めるように、特に普通科の全生徒対象『SS探求』は予算を掛けずに行えるように心がけている。
- ・自分自身の興味や進路に関わる事柄、あるいは現在静岡市や静岡の街の人々が抱えている問題点を「自分事」として問題解決する方向から探求を進める取り組み。
- ・県内の進学校における地域連携の活動としては、おそらく最も革新的な試みをしていると思われる。

## ○ 学びの多様性と機会の均等

- ・①②いずれも先日郵送していただいた「資料4」「資料5」の検討の視点や課題に対し、かなり多くの点をクリアできていると思われる。
- ・高校での卒業研究、卒業論文を充実させることで、街の中に、広い視野を持った「小さな専門家」を大量に放出することになる。そうした街（地域）は、10年、20年経つうちに、おのずから活性化すると思われる。
- ・仮に高校生の探求が稚拙なものであったとしても、学校外の人間と繋がることで、有り難さや礼儀を学ぶことが出来る。あるいは社会で様々な人が様々な苦勞を抱えていることを目で見、耳で確かめることが出来る。また、研究や論文にまとめることで自信がつき、その後の大学生活や社会人としての在り方に影響を与えていくと考えられる。
- ・現在進学高校といわれる立場にある学校は、偏差値の高い大学に何人合格者を出したか、という一点以外に価値を置いていないように感じる。それも大事なことはあるが、学びの価値を多様化させ、自分という人間が、どこの大学を出て、どんな職につき、どんな場所にいたとしても、社会の中でパイオニアや変革者になりうる貴重な存在であるということを、一人一人が少しでも感じられるように、そうした自信を身に着ける取組を、学校を通して行いたい。
- ・最後をお願いしたい点として、学校や公的な支援を通しての活動は、全県下のすべての生徒に平等に機会が与えられるやり方で考えてほしい。
- ・経済的に余裕のない生徒の能力発掘の貴重な機会となるため、特に昨今の経済格差や貧

困層の広がりを鑑み、極力「受益者負担」を行わない形で、取組を考えることをお願いしたい。

- ・ 県内ではトヨタが進める御殿場の「未来型都市」に注目が集まっていますが、トヨタも「SDGsの17の目標」の内「3. 4. 5. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 17」に取り組んでいて、「従来の技術+IT」によって、「環境との調和」「持続可能」を前提とした街づくりを展開している。今後も多くの企業がますますSDGsの目標に沿って運営を行うことが予想される。
- ・ 世界に通じる最新の情報や問題意識を持ち、街づくり、モノづくり、社会づくりをする人間を育成するとなれば、SDGsの学びは必須である。
- 他県の中高一貫校などでは、キャリア教育や国際理解、地域連携等の学びを、SDGsを軸に展開している学校もある。
- また静岡市は現在SDGsのハブ都市になっていますが、いまだ一般市民の認知度は低く、ぜひ全県での取組をお願いしたいところである。
- ICTの導入も急ぐべきことかもしれませんが、それはあくまで「最新のツール」であって、「最新の学び」ではない。「最新のツール」をもって何を学ぶべきかを考えた時、「SDGs」を軸とする学びは、間違いなく世界に通用する「最新の学び」となる。全県の高校生に「SDGs」を軸とした総合的な学びの機会をぜひお願いしたいと思う。

#### 山浦こずえ委員

- 高校2年生が一番悩み、自殺率が高いと聞いたことがある。進路決定前の霧の中にいるであろう彼らにこそ、キャリア教育が必要。
- 18歳の若者国際調査で、日本が一番社会や自分に対する意識が低い。
- 自分のことを自分の言葉で話せる子は満足度が高い。
- 自分探求と言語化、アウトプット（プレゼン）の機会を持つようにする。
- 地域課題の解決やボランティアで地域の一員、より自分事となるようにする。
- 商品開発や会社経営など一連の流れで社会の仕組みや大人の凄さを体感する。
- 静岡県が日本や世界の中で凄い所を調査、修学旅行や留学先でプレゼンする。
- 教科単元を使う仕事の大人（企業）に来てもらい授業を行う。
- 求人・業務内容から、どの学びが繋がっているか。お金の繋がっているか。
- 多様性やグローバルといじめの関係（目の前の人との関係と真のグローバル、真の多様性～モラルジレンマ）
- 身近な教諭のしくじり話やキャリアを伝える。コロナで外と接触できなくても近くに宝がある。先生は大概夢を叶えた大人だから。信頼感有用感の向上。

#### 山本昌邦委員

- 静岡の高校に優秀な人材が集まる仕組みを作る。いくつかのモデルを実行し、スペシャリストを育成する最先端の教育を行う。
- デジタル化、オンライン化は技術の発展でしかなく、心や感情の成長には十分ではない。
- 地域のニーズ、文化、産業や自然環境を生かした教育に賛成である。

### 渡邊妙子委員

- 新型コロナウイルスは、人間の研究の成果である遺伝子を逆用されたと推測される。極めて高度の学問をさらに高度に推進するため、優秀な学生が高度に豊かに存分に研究できる政策を推進すること。
- 高校生が大学進学を選択する上で、地域・企業の特徴を学び、体験することが必要である。

### (3) その他

#### 藤田尚徳委員

- コロナ禍で大きく環境が変わろうとしています。しかし、変えていい部分と変えてはならない部分をしっかり見極める必要があると思います。それが何なのか。そこについて一度立ち返って議論する必要性があるのではないかと。

#### 松村友吉委員

- 将来の高等学校のあるべき像を明示して進めると良い。  
(例)
  1. 教育の目的：志を持った能動的な人材育成
  2. 教員の資質：人間教育に関わる人材
  3. 地域の役割：全面的な支援
  4. グローバル化：インバウンド・アウトバウンド交流

#### 宮城聡委員

- 「教科書掲載の論説文を戯曲化し、生徒が対話形式で演じる」授業は、昨年度に3高校で実施され、今年度は6校ほどへ広がりつつある。ここではまず「日本語で思考する」力を伸ばす。また「聞く力」の重要性や、さらに今の若者たちに避けられている「沈黙」にも価値があることを学んでもらう。国語科の授業時間が足りない場合は「総合的な学習の時間」で行っていただくことを想定している。
- SPACの俳優・スタッフは「教科書朗読動画」の制作を5月から開始し、100作品の公開を予定している。教科書の文章、という鹿爪らしいイメージを払拭して、生徒たちに「案外面白いね」と気づいてもらえればと考えている。今、先生方にも活用を依頼しているところで、例えば給食の時間に放送する、といった使い道も追求している。  
(給食中の会話が禁じられているため)  
この先は、生徒たちが自ら朗読動画をつくってSPACに応募し、SPACの俳優やスタッフが評価する、といった形に発展させていきたい。こうした生徒たちの表現活動は、短期的には21年度からの大学入試における「総合型選抜」「学校推薦型選抜」で課外活動としてアピールすることもできる。

#### 森谷明子委員

- 世界を変える力は、より小さなコミュニティからはじまり、地域、市、県、国、世界へと伝播するものと思う。

- ぜひ「静岡方式」を多方面で確立し、全国全世界の先駆けとなる誇りある静岡につなげていただけたらと願っている。
- 少し前の話ですが、「競争しない」「授業時間が短い」にもかかわらず、「学力が世界一」ということで、「フィンランド」の教育が話題になった。フィンランドの教育の成功には様々な要因がありますが、数十年にわたって長期的に取り組まれてきた、絶え間ない改革の賜物であると言われている。  
またそれは、国民の総人口が 550 万人しかないからこそ、可能であったともいわれている。  
それに比べ、1億 2,000 万人という大所帯の日本が、こまめな改革を継続的に行うことは本当に難しいと感じますが、静岡県の人 360 万人というのは、「長期にわたるこまめな改革」を行うには、実はとても理想的な数字ではないかと感じている。  
想定外の事態が毎年のように発生するようになった一方で、国の対応の遅さに市民も不安を感じている。教育については一人一人の人生や、それぞれの家庭に直結する問題なので、極力、県単位で自立して取り組んでいくのが良いように感じている。  
ぜひあらゆる面々で「静岡方式」を試行錯誤し、紆余曲折しながらもこまめな変革を続けていただけたらと、切に願う。

#### 山浦こずえ委員

- 身近にいる一生懸命で楽しく幸せに生きている大人（憧れ、面白い、凄い）に会うのが一番良い。それが保護者であればもっと良い。
- 見る、聞く、気づく、ほめる、一緒に喜ぶ、が出来れば自己肯定感は向上する。
- ICTでも高校生教育でも「言語化」の訓練が、レジリエンスを創り、面接などの実践にも繋がり、さらにはネットの誹謗中傷防止に繋がる。

#### 山本昌邦委員

- 教育の進化、成長をどうサポートできるかが大切である。
- 指導者、先生方の成長の場や、システムを強化する必要がある。
- 新しい未来を考え続ける。（裾野市のトヨタとの街づくりなどを参考にする。）

#### 渡邊妙子委員

- 日本の国土をさらに豊かにするために、人材を育て、農産物を豊かに、美林を育て、海を豊かにする政策に力を注ぐべきである。  
日本人は恵まれた日本国の大地に育てられた。この大地に恩返しするべきである。そして、世界から観光客を迎えましょう。